

この随想の欄が一時期月報から消えたことがあったのをご記憶の方もあろうかと思えます。

その原因の一つは私にあったようです。それは私が三年前前文化庁に来て間もない頃、原稿の依頼があったのを、早々の人間が「文化」にかわりのあることを弁ずることの思はゆきと、より以上に月報の僅かな紙数を拙文で埋めることがいかにも勿体ない（さらにはこのような欄は不必要ではないか）という会計マン的発想が先に立っておこわりしたことが発端になったと思うからです。

当時、ものの本なども読みながら、「文化」とは「文化行政はどうあるべきか」などと長官にでもなったようなつもりで考えたものですが、「文化とは生活の一部、あるいは生活そのものであって、それなくしては生きていけないもの」、それ故に文化行政がいかに重要か、といったことを初任者研修などでブツたことを記憶しております。

その後、文化行政の仕事とともに、

随想

いろいろな「芸術文化」にもふれて来ましたが、それらの経験を経るに従い、少しづつもの見方も変わってきたようです。

文化が歴史的、社会的、そして経済的な基盤の上に成り立っているという点で普遍性があると思いますが、これを享受する側からは、極めて個人的あるいは個性的なものであって、一様にかつてブツたような真面目さ

「あそび」

甲斐安夫

で追求することは少し日本人的発想に過ぎはしないかと思うようになったのです。

突飛な発想、しかも古い私事の話で恐縮ですが、嘗つて名機と云われた戦斗機「ゼロ戦」の操縦訓練において、教官から操縦かんの「あそび」の重要さをとくと叩きこまれたことを思い出します。瞬時に倒すか倒されるかの空中戦斗におけるあのスマ

ートな身のこなしは「あそび」があったからこそできたということですが、古い思い出はさらに、その頃の激しい訓練生活の中で寸暇をぬすんで読んで万葉の歌集などの中に、ひそかな生けるしるしにも似たものを感じながらなんとか生きてきたことに連ります。

こんなことが三〇年も経った今日なお時折鮮烈に浮んでくることから結論を急ぎますと、文化というものをこのように「あそび」の中に把えてはどうかということなのです。

そしてそれは、貴重な文化庁発行誌「月報」に随想欄があり、それが比較的読まれているらしいことの意味について考えた結果、はじめ依頼のあったとき書かなかった自分自身の日頃のゆとりの乏しさに対する反省と弁解になってこの駄文が生れたという訳なのです。もっとも私が書いたものが「あそび」に値するものでないことは充分承知の上のことですが……。

(筆者 文化庁長官官房会計課長)

